

Archive&Report

Program

#1

<見つける、記録する>

9.30(土) 9:00-15:00

畠山鶴松の落書き

小松和彦(小松クラフトスペース)

服部浩之(キュレーター・秋田公立美術大学准教授)

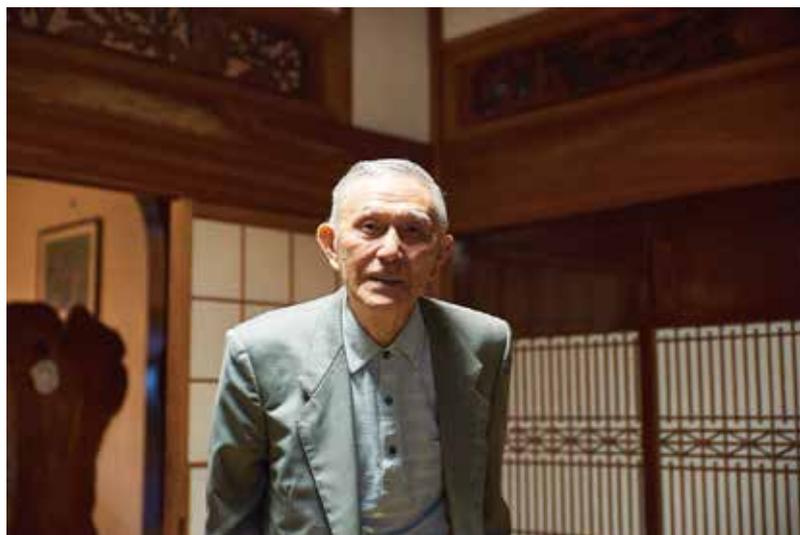
石倉敏明(人類学者・秋田公立美術大学准教授)

午前の部レポート

通期受講者 宮田優子

2017AKIBIplus五城目は、「畠山鶴松の落書き」からスタートしました。昨年度の講座で紹介された畠山鶴松翁は、五城目で生まれ育ち20世紀初めの暮らしを事細かに記録した百姓の方です。当時の祭りの様子や年中行事、日々の暮らしを細やかな絵と解説で丁寧に記録されています。本を手にとると、自然とともに1年を過ごす町の人々の生き生きとした姿が目に見えます。

今年度は、鶴松翁の息子さんである畠山耕之助さんから実際の資料を拝見させていただき、鶴松翁との思い出や当時の暮らしぶりをうかがいました。御年91歳の耕之助さんから語られる鶴松翁の人柄に触れ、膨大な資料を残すに至った鶴松翁へ思いを馳せる時間を過ごしました。



さて、そもそもごく一般の人が、なぜこのように日々の暮らしを記録として残したのか不思議に思っていた私は、実際の資料を拝見したことで、さらに謎が深まります。子ども用のスケッチブックを開けると、膨大な文字の波と、ボールペン1本で描きこまれた細やかな絵が目飛び込んできます。何かとてつもない強い意志というか衝動を感じずにはいられませんでした。どんな強い思いが、この記録を鶴松翁に書かせたのでしょうか。

Archive&Report

Program

1

<見つける、記録する>

9.30 (土) 9:00-15:00

畠山鶴松の落書き

小松和彦 (小松クラフトスペース)

服部浩之 (キュレーター・秋田公立美術大学准教授)

石倉敏明 (人類学者・秋田公立美術大学准教授)

午前の部レポート

通期受講者 宮田優子

息子さんの耕之助さんからは、幼少期の貧しかった生活や、未成年で優しかった鶴松翁の人柄、仕事の効率の良さは仕事の早い人を見て見極めると教えてもらったこと、山内番楽の保存継承に粘り強く尽力したこと、絵が上手だったことなどが語られました。お話から推察するに、鶴松翁は苦しい中でも遊び心を忘れず、優れた観察眼でぶれない考えを持つ方だったのではないのでしょうか。日々の仕事や生活の中に、楽しみを見出し、より良く生活しようとする知恵を働かせる生き方をしてきた鶴松翁の目には、高度成長期の日本の社会と人々の変容はどのように映っていたのでしょうか。現代を生きる私たちは、便利で清潔で飢えのない生活をしていますが、どこかに不自由さや息苦しさを感ず、生きがいや居場所を探し求めています。鶴松翁の目には、機械に頼り、思考しなくなる現代人の凋落ぶりが見えていたのかもしれませんが。そこで「記録する」ことで、自然に生かされ自然を利用し逞しく生きてきた人々の足跡を残そうとしたのかもしれませんが。

鶴松翁にとって、「記録する」ことが自分の思いや気持ちを表現する効果的な「術」だったとすると、自分にとって、「何をする」ことが「術(表現方法)」になるのかと考えずにはられません。鶴松翁の落書きに思いを馳せながら、自分なりの術で表現することを目標に、これから出会う五城目の面白い！を体感していきたいと思います。

Archive&Report

Program

#1

<見つける、記録する>

9.30(土) 9:00-15:00

畠山鶴松の落書き

小松和彦(小松クラフトスペース)

服部浩之(キュレーター・秋田公立美術大学准教授)

石倉敏明(人類学者・秋田公立美術大学准教授)



午後の部レポート

通期受講者 宮原葉月

秋田公立美術大学(秋田市新屋大川町)が秋田県内の4つの地域と連携し、アートマネジメントができる人材を育成するためのプロジェクト「AKIBI plus」。その内のひとつ、五城目の2017年度のプログラムが9月30日、南秋田郡五城目町でスタートした。前半は『村の落書き』の著者・畠山鶴松の息子の耕之助さんと孫の安博さんを迎え、郷土史研究家の小松和彦さんが司会を務めるトークイベントが五城目町の上山内公民館で開催された。

後半は会場をアートギャラリー「ものかたり」に移し、石倉敏明さん(人類学者・秋田公立美術大学准教授)と服部浩之さん(キュレーター・同大准教授)に加え先の小松さんを交えてトークイベントが行われた。

鶴松が生まれ育った集落の風習・風俗を書き留める「落書き」を始めたきっかけは、昭和30~40年の高度成長期で時代が大きく変わり、古いものが失われていく危機感を感じた鶴松が、子孫に伝える為に筆を取ったことだった、と小松さんの言葉で始まった。落書きという行為が生まれるところについて、石倉先生が話を展開していく。

「グラフィティ―芸術と落書き」という視点で服部さんが講演。イギリス出身のバンクシーによる社会風刺的グラフィティアートや、yang02による機械が落書きを描くというコンセプトのアートが紹介された。

Archive&Report

Program

#1

<見つける、記録する>

9.30 (土) 9:00-15:00

畠山鶴松の落書き

小松和彦 (小松クラフトスペース)

服部浩之 (キュレーター・秋田公立美術大学准教授)

石倉敏明 (人類学者・秋田公立美術大学准教授)

午後の部レポート

通期受講者 宮原葉月

鶴松翁は60歳代に描き始めたが、同じく老齢に入って絵を描き始めた作家として、色彩が美しい丸木スマや海と舟を描くアルフレッド・ウォリス（イギリス、1855-1942年）らが石倉さんより紹介された。「記憶の世界の蓄積と、束縛からの解放があって初めて描けたのかもしれませんが」と石倉さん。また鶴松翁と同じく「故郷を描く」視点でアボリジンのエミリー・カーメ・ウングワレー（1910-1996年）の名が挙がった。

上記プログラムに参加した個人的な感想は以下の通り。

トークイベントを通じ鶴松翁の「落書き」が、エミリー・カーメ・ウングワレーやアルフレッド・ウォリスらのようなアート作品として捉える視点に気付くことができた。鶴松翁が生きていた時代と秋田・五城目という土地から生まれたアート。作家自身の身近な暮らしから生まれてくるリアリティ。私は仕事でイラストを描いており、鶴松翁とは違い、クライアントの依頼に寄り沿って絵を描き起こしているの、鶴松翁のように自身の暮らしから絵が生まれてくるエピソードがとても新鮮で、強く惹かれた。講演を聞きながら自分自身を改めて振り返り、もっと身近なものに目を向けてみよう、今住む土地を知って感じて、それらを絵に起こしてみたいと思った。

トークイベントの最後に『村の落書き』に掲載されているなまはげの様子が紹介された。五城目になまはげの文化があったこと、またなまはげのお面が小さく、被っている人の顔がみえてしまうことに驚いた。また耕之助さんから鶴松翁の暮らしについて話を伺い、当時の人々の価値観や時間の捉え方等が今と大きく異なることを知った。それらが鶴松翁の絵に影響を与えたことを考えると、当時の文化や暮らしをもっと詳しく知りたくなった。当時のことを学び理解することは、今の時代を客観的に捉え直すことにつながるのではと思う。個人的にその捉え直していく過程をアートとして表現してみたいと思った。

五城目には昔の貴重な資料や文化が数々残されていると感じた。それらが失われてしまう前にこうして学ぶことができるのは、とても大切な体験だと思つづくと思う。